

海に異変、逃げる漁場

本稿から「未利用資源を活用する—美食地政学パート2—」と題して、自然に寄り添い、気候変動に適応する持続可能な食について検討する。JSTの「美食地政学に基づくグリーンジョブマーケットの醸成共創拠点」プロジェクトを通して見えてくる地球環境の変化、食の生産現場や食の生産を担う地域を支える住民、それらを中心に動きつつある産業トレンドについて取り上げ、美食地政学について掘り下げていきたい。

マリンサイエンス



同時に、脅威への対策が必要である。災害に対する備えだ。前例のない災害や異常気象、感染症などが時々起るといふことを前提とし、自然から遠ざかるのではなく、近づいていく必要がある。養殖生物の成長は海洋環境の変化に大きく影響を受ける。気候

生育域移動、データ捉える

気候変動に関する政府間パネル(IPCC)第6次評価報告書によれば、1850-1900年から1995-2014年の間に観測された世界平均気温の上昇量は0.85度Cである。今日の世界の大気中における二酸化炭素濃度は、少なくとも過去200万年間のどの時点よりも高い水準にある。大気、海洋、雪氷圏、および生物圏において観測された変化は、世界が温暖化していることに疑う余地がない証拠を示している。過去数十年間にわたり、気候システムの主要な指標は、少なくとも過去2000年間に前例のない速度で変化している。近年の海洋の変化は広範に及び、重要な海洋の指標は数百年から数千年にわたって前例のない状態にある。多くの海洋生物の生息域が、極方向および深層方向へ移動しているが、逆の方向へ移動している

生物も少数いる。このような種の間の応答の不一致は、生態系の種の構成が変化していることを意味する。マリンサイエンスの研究者や漁業従事者は、現在の海の状態を肌感覚で怖いと表現する。何が起きているか分からないから

未利用資源を活用する 美食地政学

パート2 ▷1

この前例のない気候変動への適応にはスタンスを変えて立ち向かわなければならぬ。第1に、自然の恵みと脅威を知り、自然に寄り添っていくことである。自然界で何が起きているのかデータを蓄積しなければならぬ。広範囲の地球環境の異常を扱うため、共通言語としての科学的データが必要となる。変化の中には良い変化も存在する。海の生き物は気候変動に適応するため生息域を変え続けているからだ。未利用で有価な自然資源を見つけ出した

第2に「もったいない」と思う気持ちが必要である。経済的な損失であるにもかかわらず、飲食店からの食品廃棄物が生み出されている。22年に行ったアンケートによると、食品廃棄物の計測を行っていない飲食店は全体の52.1%であり、重量の計測を行っているのは22.0%であった。従業員を対象とした食品廃棄物を減らすための取り組みを行っている飲食店は全体の32.3%であった。気候変動下では食品ロスなど経済的、資源的にムダをしている余裕はない。いち早く循環型システムに移行しなければならぬ。

第3に、人を助ける気持ちが必要である。彼だから助けて、といった損得勘定なしの助ける気持ちや行動を軽視してはならない。JSTの美食地政学に基づくグリーンジョブマーケットの醸成共創拠点



東京都市大学環境学部 環境経営システム学科教授

古川 柳蔵

ふるかわ・りゅうぞう 72年(昭47) 東京都生まれ。博士(学術)。東京都市大学環境学部環境経営システム学科教授。専門は環境イノベーション。戦前の暮らし方、自然に学ぶものづくり、ライフスタイル変革の研究や地方・都市連携プロジェクトを行う。



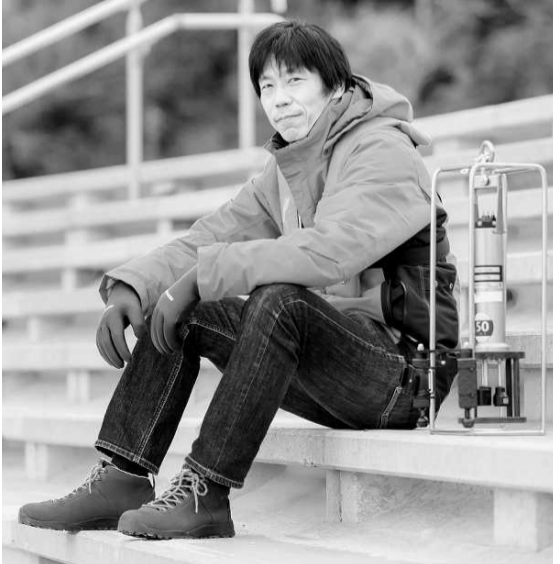
宮城県沿岸で水質データを収集する(東北大院・藤井准教授提供)

水産資源循環、地域と共創

いく中で、眼力が問われる。既に、今までのような安定して予測可能な気候、市場でなくなつた。生態系のバランスが変わり、都市と地方との関係も変わりつつある。このような時こそポジティブな思考を忘れてはならない。

東北大学大学院農学研究科准教授 藤井 豊展氏

します。漁業がどのような環境条件によって左右されるのかを事業者自身が日頃からモニタリングし、問題発生時の原因究明と対策立案を研究者とシームレスに行うことは、サイエンス実装の大きな一歩になります」



までは現場で何か問題が発生した場合、原因究明のため研究者が駆り出され、アドホック(特定の目的の)な観測を行い、データを収集分析することが慣例でした。しかし問題が起こった後にどう分析しても、結局何が原因だったのか分からないケースが大半でした。そこで本プロジェクトでは、地元の漁業者による漁業者のためのモニタリング実施を目指

生態系の「ハーモニー」見つけたい

環境モニタリング、問題発生前から

JSTの美食地政学に基づくグリーンジョブマーケットの醸成共創拠点プロジェクトのメンバーで、東北大学大学院農学研究科准教授の藤井豊展氏に近年の海洋環境の変化や科学の役割について話を聞いた。